

# 山と博物館

第34巻 第10号 1989年10月25日 大町山岳博物館

特集 信濃木崎夏期大学のあゆみ展 1/2~1/2



上空から見た現在の夏期大学全景 撮影 田中 宏

信濃木崎夏期大学の

あゆみ展によせて

牛越 充

平成元年五月新装成った信濃木崎夏期大学の竣工式が行われた。

大正六年この地に全国ではじめて一般社会人のための夏期大学が創設されて以来、どんな苦難にも一年として休むことなくアカデミズムの伝統を守り続けて来た伝統ある大学である。その時代の碩学をまねき、湖面をわたる涼風と緑濃き輝しぐれの中で、魅力あふれる学問の深淵にふれることのできる喜びは受講した者の等しく感ずるところである。この貴重な勉学の場が長い風雪の間に危機に類した。とりわけここ十年来の建物のいたみは目をおおうばかりであった。

関係者は再建をめざして郡下市町村の皆さん、全国の理解ある皆さんに協力をお願いした。と同時に夏期大学を一層ひろかれた研修の場としていく考えも発表し今後の方向とした。それは夏期の大学の講座をさらに全国の市民の皆さんに理解あるものとし、年間を通して民間団体・官公署・住民・児童生徒の研修講習の場として活用していただくということである。幸い、多くの方々のご支援・ご協力によって建物の修築がかない再出発の機を見たのである。関係者一同深く感謝の気持ちを表わすと共に、この開かれた大学への決意を具現したいと願っている。

このたび市民はじめ多くの皆さんに夏期大学をご理解いただけるように、山岳博物館において大学所蔵の貴重な資料を公開することは、私共の願いとするところでもあった。

今までも全国各地から大勢の受講者があった。鳥取県のある女性受講者は「源氏物語の秋山慶先生といえは現在の源氏物語研究の第一人者でしょう。その先生にじかに接してお話をきけるとは、なんとすばらしい所でしょうか」と遠くから来た理由を語った。信濃木崎夏期大学は得難い宝の山である。一人でも多くの方に来堂していただき、喜びを分かち合っていたきたいと願っている。

(信濃木崎夏期大学事務所長)

# 信濃木崎夏期大学の 七十有余年を歩む

荒井 和比古

## 創設のとき

信濃木崎夏期大学を創設するまでの経過については、長野県学務課長であり創立協議会の委員長であった佐藤寅太郎の「信濃通俗大学会夏期大学部経過」にくわしい。それによって経過の概要を見ると次のようである。

明治の後半より青年に対する近代思想の啓蒙、また教員の欠乏を補充するための講習会が各地で盛んに行われていた。しかし、この講習会が平素研究している人にとつては内容が低くおもしろくない、といつて一般の人には難しすぎると、明治の終り頃より頓挫を来していた。むしろ、学問に熱意ある人を県下の拠点に集め権威ある講習を開き、その人びとのレベルを上げて地方の人々を感化したらどうかとか、その人々によつて信州に大学をつくりたいなどの論が出されていた。

この講習会改革運動をすすめた人々の中に児童文学者で当時の陸郷北小学校長平林広人がいた。平林広人は信州に大学をつくるためにとりあえず信濃夏期大学をつくらうとの考えを主張していた。

一方この頃、高等教育の地方普及化を唱え自ら「日本通俗大学会」をつくり活動していた人に内務大臣鉄道院総裁の後藤新平がいた。たまたま大正五年夏、後藤新平が県下各地を講演し歩いてきた機をとらえ、平林広人や諏訪出身で東京高等師範教諭の伊藤長七らが接触をはかり、夏期大学創設の具体策を提示し

た。後藤新平は帰京してすぐに資金千五百円を寄附した上、先の文部次官で民間教育運動の先頭に立っていた沢柳政太郎、東京帝大名誉教授で法学博士加藤正治(犀水)らを推し、「信濃通俗大学会」を創立した。当初夏期大学を軽井沢に定めようとしたが用地などが整わずすすめられなかった。その反面北安曇地方では平林広人らに共鳴する校長達が木崎湖畔に夏期講習の場をつくらうと画策し、北安曇郡長藤根新太郎、大町中学校長鈴木正治らもそれを積極的に支援していた。

このことを聞いた実業家で松本大町間に信濃鉄道を敷いた今井五介は、木崎湖畔に講堂と寄宿舎をつくり夏期の大学のために場所を提供しようとして出した。こうした人々の熱意によつて木崎湖のほとりに夏期大学を実現させるめどがつき、大正六年三月「木崎夏期大学創立協議会」が松本で開かれた。

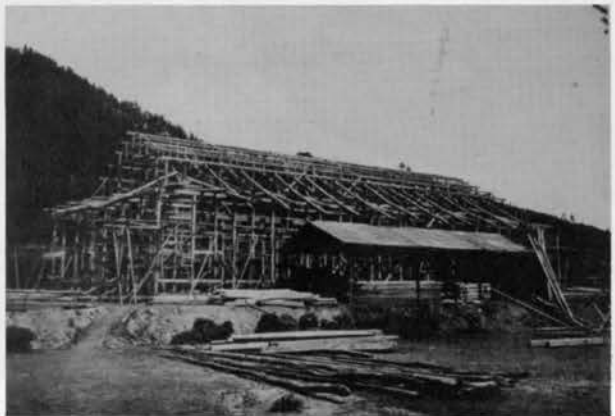
夏期大学開講中しばしば用いることばに「天の時・地の利・人の和」というのがある。まさに、木崎夏期大学の実現は、この三者が見事融合した天の配剤と感ぜざるを得ない。

第一回の開講を八月一日に決めて敷地の整地作業に入ったのが七月の始めである。それから一カ月、突貫工事で二百名の受講者を収容する大講堂・寄宿舎の建設が成された。「講堂八間口十七間奥行八間、型ヲ殿堂式二取り

廻ラス二一間ノ廊下ヲ以テス。之レニ命ジテ「信濃公堂」ト称ス。寄宿舎八間口十一間、奥行三間ノ二階建トシ、室ヲ分ツコトハ。以テ生徒ノ寄宿ニ宛ツ。開講式の朝になって完成を見たという。

七月二十四日沢柳政太郎の名で夏期大学開設の案内状が関係者に配られた。あわせて新聞・雑誌に広告がのせられ、信濃鉄道も割引するなど宣伝したので、日本各地はもとより遠くは朝鮮・ハワイからまで申し込みがあった。記録によると第一回の聴講者は六百二十余名とある。

講師は信濃通俗大学会の評議員会で大筋が出され、郡長を事務長とする地元の夏期大学役員と相談して決められた。第一回は電気工学の青柳栄司、民本主義の吉野作造、湖沼学の田中阿歌麿らがいる。同時に海沢親光、河



建築途中の信濃公堂(大正6年7月)



講師と受講生の湖上でのひととき(大正10年)



後藤新平歓迎茶話会(大正6年8月12日)



開講20周年記念式(昭和11年8月1日)



第1回登山講習会(大正6年、白馬岳)

野崎蔵、矢沢米三郎と日本山岳会・信濃山岳研究会の創設にかかわった人々が講師に招聘され、山岳関係の講座に力が入られた。同時に、受講者によって白馬登山隊が結成され、これら講師の指導のもと実地講習が行われた。その他木崎湖を利用しての水泳講習会も開かれ、地の利を生かした実践的な講座が組まれた。

経過報告書に「草創の際未だ充分の計画をなす能はざるも漸次発達改善せしめ、他日の大成を期せん」とあるように、第二回、第三回と年毎に内容・運営等に改善・修正が行われ継続発展をしていく。

その一つは寄宿舎の増改築である。宿泊希望者が多く大正九年には百四十余名もの希望で収容し切れず、せまい食堂での食事も三回ほどの交代制を余儀なくされる程であった。公堂を運営している信濃鉄道では、寄宿舎を改造したり、新しい宿舍を造るなど対応したが、まだ不足のときは湖畔の旅館や地元稲尾地区の民家を賃りするという盛況であった。

また、大正七年には木崎湖の西岸に講師のための別荘が九戸建てられ、学者村と呼ばれた。京都大学関係の青柳栄司、荒木寅三郎ら講師が利用し、朝晩湖水を和舟で横断し講義に出かけた。

この時期、皇族の方々が登山のついでに次に夏期大学を視察され、その時の記念の植樹高野槇が今大きく大学の周辺に育っている。昭和の初め頃の様子を当時の聴講生の一人は「あの広い信濃公堂に聴講者はあふれ、ついには廊下に座して聞くという盛況であった」と語っている。昭和七年には受講をおこなうことわりする事態もあつたという。

運営面も変つてゆく。大正十五年、今まで

運営の事務局であつた郡役所が廃止されるのにもない、その仕事が北安曇教育会に移された。また建物の維持管理にあつて来た信濃鉄道が、昭和十二年国有鉄道に移管されることになり、信濃公堂や寄宿舎は大町と平村共同の財産組合に無償で供与された。

この盛況期の講師の中で特に著名な人をあげるならば、考える数学の創始者藤森良蔵、西洋史学の今井登志喜、『貧乏物語』の河上肇、量子論の石原純、ベスタロッチ研究の長田新、ヘーゲルから独自の哲学をひらいた田辺元、考古人類学者鳥居竜蔵、『風土』の著者と辻哲郎、タンパク質研究の鈴木梅太郎、白樺派の作家長与善郎、インド哲学の宇井伯寿、国文学者藤村作、源氏物語の島津久基、契沖研究の久松潜、地理学の田中啓嗣、地球物理学の松山基範、平家物語の高木市之助、枕草子の池田龜鑑、神代史研究の津田左右吉、原子物理学の父仁科芳雄などがある。

ことに聴講生を集めたのは、昭和の始め東京帝大で人気の高かつた藤村作、辻村太郎の講座である。この二人の講師の来堂は十回を超え、毎年受講者に待たれる人となった。

夏期大学の運営は通俗大学の基金の利子と、県及び郡下市町村の助成金で賄つて来た。したがって昭和初期の不況は低金利をよび、基金の利子を減少させたばかりか、昭和十年には県補助金も中断、町村の助成金も滞る状況であった。以来、理事等運営にあたる人は資金の調達が頭痛の種であった。

太平洋戦争に突入した昭和十六年、突然県より「時局に鑑み県外の教職員や学生の講習会への参加を禁ずる」旨の通牒が発せられた。

困難をのりこえて

夏期大学の運営は通俗大学の基金の利子と、県及び郡下市町村の助成金で賄つて来た。したがって昭和初期の不況は低金利をよび、基金の利子を減少させたばかりか、昭和十年には県補助金も中断、町村の助成金も滞る状況であった。以来、理事等運営にあたる人は資金の調達が頭痛の種であった。

太平洋戦争に突入した昭和十六年、突然県より「時局に鑑み県外の教職員や学生の講習会への参加を禁ずる」旨の通牒が発せられた。

戦後は食糧難が開講を脅かした。昭和二十一年は創立三十周年の年であつた。受講者は米・味噌・野菜から食器・寝具まで背負つて参加した。こうした状態にかかわらずこの年の受講生は六百名を超えている。

戦後教育の六三制実施で教員が不足したので夏期大学は免許取得の講習の場となつた。そのため県の補助金が復活し関係者は息をついた。こうした時期の著名な講師としては、日本思想史の村岡典嗣、国語学者西尾実、ヘーゲル研究の務台理作、万葉集の武田祐吉、理事長であり東洋史学者である中山久四郎、農業経済の東畑精一、フランス文学の辰野隆、憲法学者宮沢俊義、日本政治思想史の丸山眞男、英文学の中野好夫、西洋史学の村川堅太郎、細胞学の湯浅明、文芸評論家白井吉見、地震学の河角廣、中国文学の竹内好、国語学者時枝誠記などがいる。

なかでも湯浅明は地元の学者として人を集め、辰野隆はその天衣無縫な弁舌と機智あふれる講義で聴講者を魅了した。

こうして困難をのりこえた木崎夏期大学は

関係者が協議の上「一切を休講とするには歴史と伝統の意義に顧みて忍びざる」と、第三部のみ二日間を開講し、辛うじて大学を継続した。

翌十七年、信濃公堂は県の健民練道場として接収され大学の開講がいよいよ難しくなつた。しかし関係者の意志はかたく、大町国民学校の講堂を借りて開講することにした。講座も縮少され、この状態は昭和二十年まで続いた。敗戦の年の八月は戦局まさに急を告げていたが三部までを復活、八月八日より十三日まで六日間開講した。終戦の詔勅の下つたのは閉講の二日後である。

戦後は食糧難が開講を脅かした。昭和二十一年は創立三十周年の年であつた。受講者は米・味噌・野菜から食器・寝具まで背負つて参加した。こうした状態にかかわらずこの年の受講生は六百名を超えている。

戦後教育の六三制実施で教員が不足したので夏期大学は免許取得の講習の場となつた。そのため県の補助金が復活し関係者は息をついた。こうした時期の著名な講師としては、日本思想史の村岡典嗣、国語学者西尾実、ヘーゲル研究の務台理作、万葉集の武田祐吉、理事長であり東洋史学者である中山久四郎、農業経済の東畑精一、フランス文学の辰野隆、憲法学者宮沢俊義、日本政治思想史の丸山眞男、英文学の中野好夫、西洋史学の村川堅太郎、細胞学の湯浅明、文芸評論家白井吉見、地震学の河角廣、中国文学の竹内好、国語学者時枝誠記などがいる。

なかでも湯浅明は地元の学者として人を集め、辰野隆はその天衣無縫な弁舌と機智あふれる講義で聴講者を魅了した。

こうして困難をのりこえた木崎夏期大学は



受講風景(平成元年8月)



老朽化の目だつ公堂(昭和56年)

昭和二十五年「教育の進展學術文化の向上に貢献すること極めて顕著」ということで、県教育委員会より表彰された。さらに昭和四十年には「長野県文化の向上に貢献した」ことで信毎文化賞を受賞した。

### 再建への道

昭和四十年頃から信濃公堂と附属施設の老朽化が目立ち修復のことが問題となってきた。運営費用も困難なところへ修理までも加わり、運営にあたる者の苦しみはふえた。運営基金は昭和四十一年の五十周年、十年後の六十年と二度にわたって募金活動を行い、多くの方々の協力をいっただいて目標額以上の達成を見、講座の運営がなされた。しかし建物の修復までには手がまわりかねていた。

昭和五十年、豪雪のため信濃公堂の天井が落ち事務所玄関が押しつぶされるという被害にあった。建物の管理者である大町市は困難な財政の中を復旧工事にあたった。しかし、翌五十一年、専門家によって「危険につき使用を禁止する」との診断が下され、大学の維持は再度難関に立たされた。関係者が協議の上応急の措置として建物に筋交い棒を入れ、何とかその年の六十周年の式典と講座を終了させた。

早急に大学の建物を再建しなくてはならない、との焦眉の急を要する課題に当時の理事や地元の役員は悩んだ。そして昭和五十五年大学運営に関係した先輩校長たちによって、「木崎夏期大学振興会」がつくられ、さらには各種団体や大学に理解を示す政治家も加わって「信濃木崎夏期大学を再建する会」が結成された。これらの会は再建するための費用として三億円を目標に募金活動をはじめた。

全国の団体・企業等に応援を求め、国・県の助成を求めたが募金は関係者の大変な努力を要した。北安曇の先生方も無利子融資をして資金拮出に協力した。当時その衝の中心にあった池上隆祐理事長はその時の気持を「大事を成さんとするものはあせるべからずへたばるべからず」と述べている。

その結果、昭和五十六年夏期大学の敷地を取得し、五十九年には大学の北側に駐車場がつくられ、同時に大正六年からの信濃公堂がとりこわれ当初の形をできるだけ残して新しい信濃公堂が誕生した。引き続き昭和六十年、附属していた寄宿舎がとりこわれ、平成元年新しく附属資料館として生まれかわった。池上隆祐は信濃公堂の建てかえられた翌々年、七十周年記念を目前にして逝去され、そのあと白木博次が理事長を継いだ。平成元年五月の竣工式において白木博次は「皆の努力で信濃木崎夏期大学が当初の姿にもどった。講師と受講者が寝食を共にしひびきを交えて学べる全国唯一の大学である。建学の精神にたちかえって理想をつらぬきたい」と挨拶をされた。

この頃の講師の中には講師謝礼をそのまま「再建にお使い下さい」ともどされる方もあり頭の下がることであった。講師の面々を見ると、日本学の創始者梅原猛、インド思想論の中村元、進化論の今西錦司、大脳生理学の時実利彦、日本語の起源をさぐる大野晋、英文学者西脇順三郎、唐詩の吉川幸次郎、数学者矢野健太郎、「夕鶴」の木下順次、ロシア文学者中村白葉、万葉集の五味智英、農村医学の若月俊、神経病理学の白木博次、江戸文学の堤精二らがいる。

こよなく夏期大学を愛された中村白葉は、



新公堂(昭和59年)

「生きることに死ぬこと」の講話を最後にその場で倒れ、昭和四十九年そのまま息をひきとった。その劇的な死に対し関係者は大町市に白葉の碑をたて忘れ難いものにした。また五味智英の流調な万葉の朗読は聴衆を魅了し、その講座は二十回余続いてなお飽きなかった。現在の講師もそれぞれ魅力ある講座を続けられ、受講者の多くは来夏を待ち望んでいる。

※文中、敬称は略させていただきます。

山と博物館第34巻第10号  
 発行所 長野県大町市 TEL220211  
 印刷所 大町山岳博物館  
 定価 年額 一、三〇〇円(送料共)切手不可  
 郵便振替口座番号 長野四一三三九三二